

松元雅和著

『応用政治哲学——方法論の探究』

(風行社、2015年)

大澤津

政治哲学の方法論を超えて見えるもの

ロールズの『正義論』以降、分析的政治哲学は様々な論争を経てきたが、近年もっとも議論が盛んなテーマのひとつが、いかにしてこれを具体的な政治と政策の現場で役立てるかという「応用」の問題である。著者の浩瀚な知識と鋭い洞察に支えられた本書は、このフィールドに対して極めて明快な見取り図を与えてくれる、信頼の置ける座標である。本書はまた大きな問題提起の書でもある。すなわち、著者の到達した高みから、我々が今後取り組むべき問題が明らかとなるのである。評者はそれを「哲学」と「政治」の境界を越えることの困難さとして考えたい。

本書で展開される様々な見解の中からあえて中心的メッセージを取り出すとすれば、次のようになるだろう。つまり、社会問題に関する規範的関心を取り戻した現在の分析的政治哲学にとって肝心なことは、論証へのこだわりと理想形成の力を放棄することなく、理想から離れた世界への適切な適用を通じて、現実変革への寄与を行うことである、というものだ。これは希望のメッセージである。分析的政治哲学は世の福音ではなくとも、少なくともそれを実践する者にとっては社会的に有意な活動であるのだから。だがこれは恐ろしく野心的な試みであり、幾多の困難を予想させる。

そのような困難さの中でも、特に重要なものとして、我々は「哲学」と「政治」の架橋をあげることが出来る。本書が説得力をもって主張するように、分析的政治哲学者が現実の問題に関心を寄せ、そこでなされている様々な議論を俎上にあげ、論証を通じて理想理論や非理想理論を展開することに問題はない。だが、どこの誰が政治哲学者の議論を発見し、活用するのだろうか。本書第6章はこの点について、民意による政治哲学的知見の受容は要しないと主張するが、分析的政治哲学の価値が現実変革への寄与にあるなら、議論を作成し、論文や書籍にまとめて満足する、ということ

では終わらないだろう。つまり、意図して議論を世に送り出すことが必要であり、さらに議論の「製造者責任」まで考えれば、その活用に対する見守りも必要であろう。ここまでくれば、何らかの仕方での学界を離れた「政治」へのコミットメントが発生する公算が高い。

ここで哲学者は学術を越えた政治的協働の一翼を担うことになる。そうなれば、どのような政治道徳的責任を政治哲学者は引き受けることになるのか、と問われるだろう。「道理的論証は腕試しや知的誇示の機会ではなく、多少なりとも現実世界に影響を及ぼそうとする試みである」(p. 282)のであれば、影響を与えられる側は、与える側に向かって、どのような道徳判断や規則によって制約されているのかを正当に問うことが出来るからだ。この問いに対して再び分析的政治哲学の方法を用いて、「政治実践に関する道徳的責任」とはどのようなものかについての分析的論証を行うだけでは、十分ではない。むしろこれは学界のみならず広くデモクラシーの中での答えを要求するため、そこでの議論の作法に従うことが必要になる。どのような資格で、どのような人々と、どのような協働を行うべきなのか、ということを実験的政治哲学の「学術としての領分」を離れた場所から、広く社会に対して明らかにすることが求められるのだ。これは分析的政治哲学の内部では答えきれない問いである。

このように、学術としてすべての「望ましいもの」を達成しようとする中で、分析的政治哲学はそれ自体の限界もまた、自覚することになる。だが、このような限界は、分析的政治哲学の方法論的限界であって、著者の限界ではない。むしろ、著者は本書によって、この限界を共に超えることへと我々をいざなう。それはまさに、方法論を通じて方法論を超えようとする著者の、卓抜した知見と議論が到達した高みからこそ我々が見ることを許された、新たに開拓されるべき荒野なのである。